

佳作

テーマ…医療と福祉、わたしの体験 「私が見た『チャレンジド』」

和歌山県・近畿大学附属新宮高等学校3年 稲葉莉帆

「チャレンジド」——。それは障害を持つ人を表す新しい言葉で、試練を乗り越えるチャンスを与えられた人、という意味を持つ。私は今年、ボランティアで二つの障害者施設を訪れ、たくさんの「チャレンジド」達を目の当たりにした。

一つ目の障害者施設では、障害を持つ大人達と触れ合った。私が部屋に入った瞬間、小さな少女が無言で私の手を握った。しかしその少女は、実は私の一回り以上も年上の大人であった。成長が止まり、言葉も話せないけれど、私のことを歓迎してくれているのだ、と感じた。そして私はある男性の車椅子を押して近くの公園へ向かった。その男性は話すことはおろか目も見えず、身体もほとんど動かせない。しかしベンチに座って食事を手伝っていると、無表情だった男性の顔がだんだん明るくなっていくのが分かった。そして施設に戻ろうとした時、突然微笑んで抱きついて来てくれた。その笑顔や感じた身体の重みに「ありがと」と言ってくれてはいるのではないかと思った。

言葉を話せないことで、自分の気持ちを上手く伝えられない人もいる。しかし、その女性や男性の気持ちは、その手を握る強さから、その笑顔や身体に感じた重みから、確かに伝わった。そこに言葉は無くとも、気持ちは伝わるのだということを教わった。彼らは「与えられた試練」を乗り越えようとしている、まさに「チャレンジド」であった。二つ目の障害者施設では、障害を持つ子ども達と触れ合った。目も見えない子ども、耳の聞こえない子ども、知的障害を持つ子ども、ダウン症を持つ子ども——。さまざまなお子さまも達だったが、私が受けた印象は想像とはまるで違った。それは、障害を持っているように見えない、つまり、よく見る子ども達と変わらない、ということだ。出会った子ども達はとても人懐っこくて明るかった。しかし、だからこそ招

く「試練」を私は目の当たりにした。子ども達を連れて施設のマイク口バスで隣町にイルカを見に行った時のことだった。夏休み中ということもあってか、多くの観光客で賑わっていた。知的障害を持つある男の子が嬉しそうに、観光に来ていた少女に話しかけた。どこから来たの、そう問いかけただけなのに少女は見向きもしなかった。何度も話しかけていたのに、少女の母親はちらりと男の子を見るなり、少女を連れて去ってしまった。私はその男の子のきょとんとした顔が忘れられない。バスに乗って帰ろうとした時、バスに書いてある施設の名前を指差して話す人々の冷たい表情も。

施設の人に聞いた話によると、最近は障害を持つていることが一見分かりにくい子が増えているのだという。それが裏目に出ると、「ちよつと変わった子」という扱いを受けてしまう。施設で出会った子ども達も今後、そのような「試練」と戦い、周囲から冷たい目で見られてしまふのかと思うと、とても胸が苦しかった。

私は障害を持つ人が世間で肩身の狭い思いをしていることを疑問に思う。障害を一つの個性として何故受け入れられないのか。何故分け隔てなく平等に接することができないのか。私は障害を持つ人と触れ合い、元気をもらった。どんな障害を持つ人も精一杯「試練」を乗り越えようとし、前向きで明るかった。たくさんの「チャレンジド」達を目にし、いつしか私も「試練」を乗り越えようとしている人々を手伝う仕事に就きたいと思った。

最近、とても心温まる場面を見た。学校から帰っていると、施設にいた男性が道路を走る車に手を振っているのを見た。多くの車が不思議そうに通り過ぎていく中、一台のバスの運転手が笑顔で男性に手を振り返っていた。男性が嬉しそうにしているのを見て、胸が熱くなった。日本中がそのような光景で溢れ、「チャレンジド」達の挑戦を皆で応援できる日が来ることを、私は強く信じている。